

玉皇廟から永福寺へ

——『金瓶梅』の構想(続)——

大塚 秀 高

まえがき

筆者は「『金瓶梅』の構想——『封神演義』『三国志演義』との関係を中心に——」⁽¹⁾(以下「前稿」とよぶ)ならびに「二統研究前後」の二⁽²⁾(同じく「補稿」とよぶ)において、『金瓶梅』には『三国志演義』や『封神演義』の影響が見過ごせないことを論じた。本稿はこれを承け、前二稿では論じえなかつた諸点につきさらに考察したいと考えている。

一

『金瓶梅』のテキストには二系三類⁽³⁾が存在しているが、これまで日本で研究の対象となってきたのは現存諸本中最古の系統と目される『金瓶梅詞話』にかぎられる。

玉皇廟から永福寺へ

四七

『金瓶梅詞話』（以下ではこれを「詞話本」とよぶ）は一六一〇年代後半、万曆末年にその原刊本が刊行されたが、まもなく、おそらく崇禎初年にいたり、本文に改訂を施し、繡像と批評を附した新版が刊行され（以下これを「改訂本」とよぶ）、詞話本は以後刊行されることがなかった（らしい）。改訂本には明らかに異なる複数の版本が現存している。それゆえ、以下の引用の底本には、王汝梅氏が「以原刊本為底本翻印、為現存較完整的崇禎本」とし、影印本も刊行されている北京大学所蔵の『新刻繡像批評金瓶梅』をもちいる（北京大学出版社、一九八八年八月）。詞話本には小異をとまなう複数のテキストがあるが、引用の底本には日光山輪王寺所蔵本を影印した大安本をもちいる。

詞話本と改訂本の間にはおよそ次のような相違が存在する。小野忍氏の「解説」⁽⁴⁾により、それを紹介しておきたい。

最も大きな違いは第一回の前半部に見られる。「詞話本」では第一回が項羽と劉邦の女難物語を前置き（これを「人話」という。いわばマクラである）として、最初に『水滸伝』の英雄武松が登場する。「改訂本」ではそれが、物欲と色欲についての一般論を前置きとして、最初に物語の主人公西門慶が登場する。そして前者では武松の虎退治が続く、後者では西門慶が応伯爵・謝希大らの遊び仲間と義兄弟の誓いを立てる話が続く。「改訂本」では、武松虎退治の詳細は省いて、西門慶が応・謝の二人とともに、虎退治の武松を迎える街の賑わいを見物に行くと、いう仕組みになっており、武松は西門慶のあとに登場する。そのほかの主な違いは次の通りである。

(一) 各回の表題および各回冒頭の詩が違う。

(二) 「詞話本」には山東方言が多い。「改訂本」では、それがよほど削られている。これは南方人に読みやすくするためだったという（鄭振鐸の説。同氏の論文集『中国文学研究』上巻に収める「談『金瓶梅詞話』」に見え

る)。

(三) 第五十三―五十四回の大部分がたがいにまったく異なる。これは、第一回前半に次ぐ大きな違い。「三文文士が補った」ことと関係あるらしい。

(四) 「詞話本」には、第八十四回に、『水滸伝』から借用した箇所がある。これは、西門慶の未亡人呉月娘が泰山に参籠しての帰り、山寨に拉致され、そこの一頭目王英(『水滸伝』の英雄のひとりだが、たいへんな好色漢)に手ごめにされかけるのを、居合わせた宋江がとめて事なきを得るといふ箇所である。これは、『水滸伝』第三十二回からの借用である。「改訂本」ではそこが削られている。

ふたむかし以上も前の小野氏の「解説」を引いたのは、それが詞話本と改訂本の相違を概括的に論じたものだからなのだが、それと同時に、そうした相違が生じたゆえんについての考察が、その後も遅々として進んでいないことを示したかったからである。⁽⁵⁾ それゆえ、以下ではこの「解説」が過不足のないものかにつき検討することから始めよう。一見してわかる(一)についてはここで改めて論ずるまでもなからう。(二)の山東方言については筆者には判定がつかず、鄭振鐸説の当否についても保留せざるをえない。よってここでは(三)と(四)の実態とその意味するところにつき考察してみることにはしたい。なお、「三文文士が補った」云々は沈徳符『万曆野獲編』卷二五の次の記載を承けたものである。以下の考察とも関係するので、関連部分を引用しておきたい。

袁中郎《觴政》以《金瓶梅》配《水滸伝》為外典、予恨未得見。丙午、遇中郎京邸、問：「曾有全帙否？」曰：「第睹数卷、甚奇快。今惟麻城劉澁白承禧家有全本、蓋從其妻家徐文貞録得者。」又三年、小修上公車、已攜有其書、因与借抄挈歸。吳友馮猶龍見之驚喜、懲瀆書坊以重價購刻；馬仲良時權吳閩、亦勸予応梓人之求、可以療飢。

予曰：「此等書必遂有人板行、但一刻則家伝戸到、壞人心術、他日閻羅究詰始禍、何辭置對？吾豈以刀錐博泥犁哉！」
仲良大以爲然、遂固篋之。未幾時、而吳中懸之國門矣。然原本実少五十三回至五十七回、偏覓不得、有陋儒補以
入刻、無論膚淺鄙俚、時作吳語、即前後血脈、亦絶不貫串、一見知其贗作矣。
ひるがえつて、詞話本の第五十三、五十四回は以下のごとき構成をとっている。

(猫にびつくりして泣きやまない) 官哥を心配し李瓶児のもとを訪れた呉月娘が、潘・孟二人の立ち話に不快な
思いをし、薛姑持参の葉を呑むことにした。劉太監の屋敷を訪ねた西門慶にとり残された潘金蓮は陳經濟と昨日
の続きを始める。二人がいざ佳境というところに西門慶が帰ってくる。妊娠保証日が翌日だった呉月娘は西門慶
を潘金蓮のもとにゆかせる。翌日応伯爵がかねて約束の五百両をとりやつてくる。その夜西門慶は呉月娘の部
屋にとまる。翌日呉月娘と願掛けの相談をしている李瓶児のもとに迎春がやつてきて官哥の具合が悪くなつたと
知らせる。西門慶は官哥のため、あやしげな占いに駆け回る。その最中にも潘金蓮と陳經濟はいちやいちゃする。
翌日応伯爵がやつてきて、西門慶のために一席設けたいと言ひ出す。

(第五十三回)

応伯爵が西門慶の下僕を使つて宴席の準備をしているところへ白來搶、常時節がやつてきて賭け碁を始める。
そこへ謝希大と呉典恩の二人、続いて歌うたいの呉銀児と韓金釧、最後に西門慶がやつてくる。一同はうちそろつ
て舟に乗り、劉太監の屋敷で呑めや歌えの宴会となるが、李瓶児が急病との知らせに西門慶は急遽帰宅する。残
された応伯爵は韓金釧をからかう。西門慶のよんだ任太医の葉で李瓶児は翌朝には回復する。
これに対する改訂本の第五十三、五十四回は以下のようになっている。

(第五十四回)

西門慶が劉太監の屋敷を訪ねた機に乗り、潘金蓮は陳經濟と昨日の続きを始める。二人がいざ佳境というおり

に西門慶が帰ってくる。妊娠保証日が翌日だった呉月娘は西門慶を潘金蓮のもとにゆかせる。翌日の夜、西門慶は約束通り呉月娘の部屋にとまる。翌日西門慶は官哥を見に李瓶児のもとを訪ねる。李瓶児は願掛けの話をし、西門慶は玳安に王姑を探しにゆかせる。そこへ応伯爵がやってきて黄四李三のことをもちだが西門慶は知らぬふり。応伯爵は郊外に一席設けたいと言いつつ、そこへ王姑がやってきて、葉節経・陀羅経による功德をするよう提案する。

(第五十三回)

西門慶を応伯爵の席にゆかせ、呉月娘も功德のために観音庵にでかける。西門慶一行は城から二十里ほどの内相花園にゆきそこを見物する。応伯爵は歌うたいの韓金釧をからかう。残された潘金蓮は陳経済といちやいちゃしていたが小玉に邪魔される。帰宅した西門慶は李瓶児の部屋にとまるが、出産後体調のすぐれぬ李瓶児のため、翌日任医官をよぶ。任医官は脈を看たあと李瓶児を一日見たいと言いつつ、その後葉をめぐるだけじゃれ。

(第五十四回)

すじが複雑であり、言葉のやりとりに生彩がある『金瓶梅』のあらすじを要約しようというのがそもそも無理な注文であつて、以上の要約もそれぞれのポリウムを正確に反映したものとはいえないのだが、それでも両者のおおよその違いを知る目安くらいにはなろう。ここで筆者は第五十四回「応伯爵郊園会諸友 任医官豪家看病症」の応伯爵の招宴に注目してみたい。

詞話本によれば、西門慶らはまず応伯爵の家に集い、そこから応伯爵の提案にしたがつて郊外にでて、南門外三十里あまりの劉太監の庄前で船をとめ、これまたその提案によつてそこで園遊することになっている。応伯爵の提案に西門慶は「也罷。就是那算也好」と応え、なんら故障を述べなかつたし、園遊後もしごく満悦の様子であつた。本文

にはその景色を述べた但見が組み込まれ、あたかもそこが西門慶にとつて初遊の地であるかのごとき扱いがなされている。だが、西門慶は直前の第五十三回でそこにいつており、この設定は矛盾しているといわざるをえない。改訂本が出城二十里の内相花園としたゆえんであろう。

ところで、詞話本によれば、応伯爵の屋敷に集まった者は、順に琴童・玳安・白來搶・常時節・謝希大・吳典恩・吳銀児・韓金釧・西門慶の九名であった。このうち改訂本には玳安・常時節・謝希大・韓金釧・西門慶の五名と琴童にかわる書童のみが登場する。吳銀児については「有病去不得」と説明があるのだが、白來搶と吳典恩についてはなんの説明もなく省かれている。

そもそも白來搶・常時節・謝希大・吳典恩・応伯爵は西門慶といわゆる十友の関係にあつた。この十友について、詞話本は、第十回「武二充配孟州道 妻妾宴賞芙蓉亭」の李瓶児初登場のうちに、その夫たる花子虚を紹介したのち、以下のごとく紹介する。

……如今花太監死了。一分錢多在子虚手裡。毎日同朋友在院中行走、与西門慶都是会中朋友。西門慶是個大哥、第二個姓応、双名伯爵、原是開細絹舖的応員外兒子。沒了本錢、跌落下来、專在本司三院幫嫖貼食。会一脚好氣毬。双陸棋子、件件皆通。第三個姓謝、名希大、字子純。亦是幫閑勤兒。会一手好琵琶、毎日無營運、專在院中吃些風流茶飯。還有個祝日念、孫寡嘴、吳典恩、雲裡手、常時節、卜志道、白來搶、共十個朋友。卜志道故了、花子虚補了。每月会在一処、叫兩個唱的、花攢錦簇頑要。

つまり、もともと西門慶を含む十人でグループが出来ていたのだが、卜志道が死んだので今はかわりに花子虚がはいっていると述べているのである。

ところで、詞話本における十友の紹介はこのみではなかった。第十一回「潘金蓮激打孫雪娥 西門慶梳籠李桂姐」にも同様だがやや異なる一節がある。それも以下に引いておこう。

那西門慶立了一夥、結識了十個人做朋友。每月會茶飲酒。頭一個名喚応伯爵、是個潑落戶出身。一分兒家財都闖沒了、專一跟着富家子弟、幫闖貼食在院中頑耍。諱名叫做応花子。第二個姓謝名希大、乃清河衛千戶官兒、応襲子孫。自幼兒沒了父母、遊手好閑、善能踢的好氣毬。又且賭博、把前程丟了、如今做幫閑的。第三名喚吳典恩、乃本県陰陽生。因事革退、專一在県前与官吏保債、以此与西門慶來往。第四名孫天化、綽号孫寡嘴、年紀五十餘歲。專在院中闖寡門、与小娘伝書寄柬、勾引子弟、討風流錢過日子。第五是雲參將兄弟、名喚雲離守。第六是花太監姪兒花子虛。第七姓祝名喚祝日念。第八姓常名常時節。第九個姓白名喚白來創。連西門慶共十個、衆人見西門慶有些錢鈔、讓西門慶做了大哥、每月輪流會茶擺酒。

詞話本の成立過程と深くかわるこうした重複の意味についてはひとまずおくこととし、ここでは、この十友紹介と第十回のそれとの間に異なる部分があることをとりあえず確認しておきたい。

ひるがえって、詞話本第五十四回であるが、ここでは常時節、白來搶、吳典恩の三名、就中前二名が活躍し、なおかつ孫寡嘴と祝麻子が話題にのぼっていた(祝麻子は祝日念のこと)。すなわち、新十友のうち、すでに死亡した花子虚と第百回で重要な働きをする雲裡手をのぞくすべての者が登場しないと言及され、以後も引き続いて活躍する、応伯爵、謝希大以外については、ほとんど最初にして最後の働き場が与えられていたのである。しかも、常時節と白來搶についてはその名に託された寓意さえ示されていた。賭け碁の待ったをめぐる二人の争いに以下のごとき一節がある。

伯爵道：「這一着便将就着了。也還不叫悔。下次再莫待恁的了。」常時節道：「便罷。且容你悔了這着。後辺再不

許你白來創我的子了。”白來創笑道：“你是常時節輸慣的、倒來說我。”

つまり、白來搶（創）にはただどり、常時節には毎度毎度負けっぱなし（貧乏神）という寓意が託されていたのである。だが、改訂本では白來搶は白來搶でも白來創でもなくなっていた。当然以上のエピソードも必要ではなくなっていた。否、白來搶（創）改め白賚光にあらたに付与された寓意にとつて、このエピソードの存在は有害であった。このエピソードの存在こそが改訂本の第五十四回から二人を追放し、ひいてはそこに大幅な改訂をもたらしたゆえんだったのである。

二

続いて改訂本における十友の紹介のされ方をみておこう。なんとそれは改訂本と詞話本で内容が大きく異なる第一回においてであった。かくして、改訂本の第五十三、五十四回における書き替えが第一回のそれと連動する要素をもつたものだったことがわかる。⁽⁶⁾

改訂本第一回の「西門慶熱結十弟兄 武二郎冷遇親哥嫂」では、入話ののち西門慶が紹介され、その父西門達と「結識的朋友」の紹介が続く。以下にそれを引こう。

結識的朋友、也都是些幫閒抹嘴、不守本分的人。第一箇最相契的、姓底名伯爵、表字光侯、原是開絀段舖底員外的第二箇兒子。落了本錢、跌落下来、專在本司三院、幫嫖貼食。因此人都起他一箇諱名、叫做底花子。又会一腿好氣毬、双陸棋子、件件皆通。第二箇姓謝名希大、字子純、乃清河衛千戶官兒底襲子孫。自幼父母双亡、遊手

好閑、把前程丟了。亦是幫閑勤兒、會一手好琵琶。自這兩箇与西門慶甚合得来。其餘還有幾箇、都是些破落戶、沒名器的。一箇叫做祝実念、表字貞誠。一箇叫做孫天化、表字伯脩、綽号孫寡嘴。一箇叫做吳典恩、乃是本県陰陽生。因事革退、專一在県前与官吏保債、以此与西門慶往来。還有一箇雲參將的兄弟、叫做雲理守、字非去。一箇叫做常峙節、表字堅初。一箇叫卜志道。一箇叫做白賚光、表字光湯。說這白賚光、衆人中也有道他名字取的好聽的、他却自己解說道：「不然、我也改了。只為当初取名的時節、原是一箇門館先生說：『我姓白、当初有一箇甚麼故事、是白魚躍入武王舟。』又說：『有兩句書、是周有大賚、于湯有光、取這箇意思。所以表字就叫做光湯。』我因他有這段故事、也便不改了。」說這一干共十數人、見西門慶手裡有錢、又撒漫肯使、所以都乱撮哄着他、要錢飲酒、嫖賭齊行。

改訂本はこののち、同じ第一回の応伯爵の言葉のなかで「便是前日卜志道兄弟死了」と卜志道の死が読者に知らされ、引き続き、西門慶の口から「咱兄弟們似這等会来会去、無過只是吃酒頑耍、不着一個切実、倒不如尋一箇寺院裡写上一箇疏頭、結拜做了兄弟、到後日彼此扶持、有箇靠傍、到那日咱少不得要破些銀子、賈介三牲、衆兄弟也便随多少各出些分資、不是我科派你們。這結拜的事、各人出些、也見些情分」と結拜のことがきりだされ、謝希大のやはり十人がよいとの意見をいれた西門慶が隣家の花子虚の名を口にする、という具合に情節が展開する。当然のことながら、第十回ならびに第十一回からは先の十友紹介の一節が消えてしまった。

ひとまずここで十友に関する詞話本と改訂本の相違点ならびに共通点を整理し、表の形にしておくことにしたい(第十一回の前の数字はそこでの紹介順)。

詞話本第十回 第十一回 改訂本第一回

応伯爵	1 応伯爵・応花子	応伯爵 (光侯)	応花子
謝希大 (子純)	2 謝希大	謝希大 (子純)	
祝日念	7 祝日念	祝実念 (貢誠)	
孫寡嘴	4 孫天化・孫寡嘴	孫天化 (伯脩)・孫寡嘴	
吳典恩	3 吳典恩	吳典恩	
雲裡手	5 雲離守	雲理守 (非去)	
常時節	8 常時節	常時節 (堅初)	
卜志道・花子虚	6 花子虚	卜志道	
白来捨	9 白来創	白齊光 (光湯)	

改訂本は詞話本では謝希大のみにとどまっていた表字 (もともと名と関連するものが選ばれる仕組みになっているのだが、表面ばかりか諧音でも関連する字面のものを選ぶのは容易なことではなかったろう) を残る八友にも極力付与し、なおかつその寓意を直接示さない文字に替えたとおぼしい。祝日念を祝実念とし、常時節を常時節としたのがそれである。だが、そののみならず、白来捨 (創) を白齊光表字光湯とかえた。後者は非常に重要な点なのであるが、それについて論ずるに先立ち、白来捨 (創) (と西門慶) をのぞく十友の姓名に秘められた寓意につき考察してみた。

応伯爵が応白嚼 (ただぐいに応ずる) の諧音であることは明白である。第十二回に李桂姐が応伯爵を「只会白嚼人」と揶揄する場面があるからである (光侯は広喉の諧音であろうか)。卜志道については魯歌・馬征両氏、黄霖氏とも一

致して不知道（知らない）の諧音とする。⁽⁷⁾このほかの者につき、魯・馬両氏は、祝日念は逐口念（逐日給富家子弟或妓女等人念書柬之類的東西）の、呉典恩は無点恩（一点都不記别人的恩徳）の、常時節は常時借（經常借錢）のそれぞれ諧音とし、孫天化の綽名孫寡嘴と雲離守（雲裡手）については、それぞれ「在妓院中、闖寡門、給小娘伝書寄柬、勾引富家子弟、討風流錢過日子」「手伸得很长、想撈别人的老婆和錢財、但又没撈上、因手在雲裡、不切實際」とした。

この解釈、さすがと思わせるものもあるが、首を傾げたくなるものもなくはない。そもそも『金瓶梅』の登場人物の名を諧音によつて解き、そこに託された寓意を明めんとした先駆者は張竹坡であつた。以下にその「金瓶梅寓意説」を引こう。⁽⁸⁾

又有因一人而生数名者：応伯（自）爵（嚼）、字光侯（喉）、謝希（携）大（帶）、字子（紫）純（唇）、祝（住）実（十）念（年）、孫天化（話）、字伯（不）修（羞）、常時（時）節（借）、ト（不）志（知）道、呉（無）典恩、雲裡守（手）、字非（飛）去、白頼光、字光湯……因西門慶不肖生出数名也。

これまた苦心の作ではあるが、字解に一貫性が欠如しているよう感ぜられる。謝携帶字紫唇や住十年になにほどの寓意があるのか、疑問といわざるをえまい。そこで、以下に筆者なりの字解を掲げ、識者の批判を仰ぐことにしたい。先の引用からみて、常時（時）節は常時節輸慣の歇後語とみたい。ただ、常時借の諧音とみる説も捨てがたい。呉典恩は無添恩または無忝恩の諧音とみる方がよからう。祝日念については助合捻（合も捻も性交にかかわる動作）の、孫天化については損添話（口添えてだめにする）の諧音とみたい（伯脩は不差でよからう）。雲裡手（離守）については雲雨裡手（セックス上手）の省音ともみられるが、表字の非去（飛去の諧音）から運離手（運のつき）の可能性

の方が高そうだ（改訂作業実施者の認識はそうだったに違いない）。ちなみに、張竹坡は「金瓶梅寓意説」の別の箇所
で「後用雲裡守入夢、月被雲遮、小玉随之、与兔俱隱、情文明甚」といつており、文字通り雲とつたようだ。しか
く十友は西門慶にたかり、これを墮落させる蠹魚とみなされていた。さすれば、魯・馬両氏が言及せぬ花子虚と謝希
大についても同様な寓意が託されているとみてよからう。私見ではそれぞれ話子虚（話はうそ）と謝稀怠（感謝は稀
で怠る）の諧音に相違ない⁽⁹⁾。もちろん、問題の白来搶（創）の寓意も、本来はこれと同様のものであったと推定すべ
きであろう。

魯・馬両氏は白来搶につき、「諧的是『白来撞』（方言）『創』『撞』同音、即吳月娘罵白来創時所說的『平白有要没
緊来人家撞些什麼？！』或諧『白来闖』（方言）『創』『闖』亦同音、即平安兒罵白来創時所說的『来我家闖的狗也不咬！』
とする。この説、おそらく正鵠を射ていよう。本文中に証拠があるうえ（改訂本第三十五回に二人のこの言葉がその
ままみえるのは削り忘れであろう）、他の十友の姓名に付与された寓意と平仄があうからである。むろん白来搶のま
ま、または白頼搶でもよかつたらう。搶にはうばう意味があつた。それならなぜ改訂本の第一回はこれを「白賚光表
字光湯」と改めたのであろうか。

白来搶（創）から白賚光表字光湯への変更が改訂作業実施者の気紛の所産でないことは、その姓名と表字の関連を
語る長広舌からも明白である。周の武王が殷の紂王を征伐せんと孟津で黄河を渡つた際、武王の舟に白魚が躍び込ん
だ話は『尚書大伝』卷三や『史記』周本紀にみえる。兵を象徴し殷の正色を帯した白魚の入舟は殷亡周興の兆と解さ
れた。「周に大いなる賚^{たまもの}有り」は『論語』堯曰にみえ、「善人は是れ富めり」に続く。武王が紂王を伐ち、革命をおこなつ
た際の言葉とされる。「湯と于^くぶとも光^{ほまれ}有り」は『尚書』泰誓中と『孟子』滕文公下にみえる。泰誓は「惟^これ十有一

年、武王は殷を伐つ。一月戊午、師は孟津を渡る。泰誓三篇を作る」で始まる武王の誓詞であつた。つまり、賚光にせよ光湯にせよ、武王をほめたたえ、ひいては紂王の悪虐を指弾する意図をもつた言葉だつたのである（なお、以上に掲げた出典はいずれも「乱臣十人」という言葉を連想させる。この乱はいわゆる乱ではなく治の意味であるが、文字どおりの乱臣ととり、白賚光を含む西門慶の十友を指さんとしたともとれなくはない。記して後放に待ちたい）。白來槍（創）から白賚光表字光湯への変更には、それまでそこにそれを暗示する言葉を配しておいたにもかかわらず（補稿を参照されたい）、読者の多くに気づかれることのなかつた『金瓶梅』本来の創作意図¹⁰を、これまで以上に明示せんとする欲求にもとづくものだったとみなせる。ただ、賚光や光湯は諧音により寓意を示したのではなく、歴とした典故を踏まえたものだったから、「有両句書、是周有大賚、于湯有光」だけでは読者に思いを致させることが出来ない可能性があつた。それゆえ、改訂作業実施者は姓の白にかこつけ、「我姓白、当初有一箇甚麼故事、是白魚躍入武王舟」と書き足し、読者の脳裏に必ず武王伐紂の故事が浮かぶようにしたのである。

以上の推定の通りなら、改訂作業実施者が『金瓶梅』を武王伐紂の故事にもとづき構想されたものと認識していたことは明らかである。問題はそれが詞話本の編者、ひいては原作者の認識であつたかである。

三

ここで前稿ならびに補稿で論じた諸点のうち、『封神演義』の『金瓶梅』への影響に関する部分を整理しておきたい。

『金瓶梅』の基本構想は『封神演義』の構想をそのまま借り、潘金蓮を妲己に、西門慶を殷の紂王になぞらえ、武王すなわち武松に征伐されるまでの間、この二人に悪逆非道のかぎりを尽くさせることであつた。そして、この基本構想を作者の脳裏に湧出せしめたものこそ、武王が武松同様、兄を無残に殺された事実であつた。それゆえ武松は武王の父文王が幽閉から解放されたと同じ七年目に流刑からもどつて兄の仇を討つたのである。しかも、そのとき武松は武王と同様、妲己ならぬ潘金蓮の首のみをとつていた。さらにいえば、『金瓶梅』第百回の普静による死者の薦拔は、『封神演義』第九十九回の姜子牙による戦没将相神仙の封神をモデルにしたものであつた(以上前稿)。その証拠に、『金瓶梅』には複数の、西門慶を紂王に、潘金蓮を妲己になぞらえた箇所がある(同補稿)、と。

それなら、以上に加え、本稿で指摘してきた白來槍(創)から白賚光への書き替えの事実以外、『金瓶梅』の基本構想が『封神演義』のそれによつてゐることを証する事実はないのか。

『封神演義』は封神あるゆえに『封神演義』であつた。改訂本の編者にとつて、『金瓶梅』の基本構想が『封神演義』のそれをなぞつたものであることが自明だつたなら、白來槍(創)から白賚光表字光湯への変更にも鑑みても、改訂作業は、その基本構想をより明示する方向でなされたに相違ない。『金瓶梅』にあつて、『封神演義』の封神にあたる死者の薦拔をするのは普静であり、舞台は永福寺であつた。普静の『金瓶梅』への初登場は第八十四回「呉月娘大鬧碧霞宮 普静師化縁雪潤洞」、永福寺のそれは第一回「西門慶熱結十弟兄 武二郎冷遇親哥嫂」であつたが、この両回とも、改訂本で詞話本から大幅な変更がなされた回であつた。しかも、普静の初登場が七年の流刑から帰つた武松による潘金蓮殺し(第八十七回)以前であることが注目される。『金瓶梅』(詞話本)の作者(ないしは作者グループ)以下単に作者という。最後に『金瓶梅』を完成させた人物を含む)の構想に当初から封神があつたことの証左となるか

らである。

話題をもとにもどそう。詞話本の第八十四回には六箇所『水滸伝』を「抄襲」したところがあるという。⁽¹⁾以下にそれをあげれば、

- 1 第七十四回の燕青の目に映った岱岳廟のありさまを詠んだ韻文
- 2 第四十二回の九天玄女廟に身を隠した宋江の夢に現れた玄女のさまを詠んだ韻文
- 3 第五十三回の柴皇城の屋敷が高唐州知府高廉の妻の弟殷天錫に占拠される段
- 4 第七回の林冲の妻が高衙内の横恋慕を拒否した際のセリフ
- 5 第三十二回の清風寨寨主劉高の妻が王英に拉致され、宋江の説得で解放される段
- 6 第三十二回の清風山を詠んだ韻文

となる。改訂本はこのうち5と6を省いた。ひるがえって考えてみるに、1、2（ならびに6）は韻文の借用、3は殷天錫という名前の借用、4はセリフの借用であつて、情節の借用といふべきものは5のみであつた。韻文の借用は研究者が鶴の目鷹の目で探してやつと発見する底のものであつて、かりに以前どこかで読んだような気がしたとしても、読み飛ばされたろう。セリフの借用とてお定まりの場面でのお定まりのセリフと見過ごされるに相違ない。してみると、改訂本の編者は読者の念頭から『水滸伝』を直接連想させるもの（たとえば武松以外の好漢の名）を出来るかぎり締め出そうとしたのではあるまいか。このことは、改訂本が第一回を武松の虎退治から始めず、西門慶の十友結盟から始めるよう変えたことも通底しよう。

なお、ここで考えておかねばならないことがある。殷天錫の問題である。上記3にあげた殷天錫の段は、5のそれ

と異なり、情節そのものはまったく借用されず、悪玉の姓名殷天錫のみが使われたにとどまる。しかも、『金瓶梅』の殷天錫の形象には、林冲の妻（呉月娘にあたる）に横恋慕した高衙内のそれとの共通性の方が強かった。周鈞翰氏が論ずるところ、『金瓶梅』の殷天錫の段は『水滸伝』の第五十三回と第七回的情節をなймаぜにしたものだったのである。それならなにゆえ『水滸伝』を連想させる殷天錫の名を使ったのか。『金瓶梅』（詞話本）の作者にはその名へのこだわりがあり、改訂作業実施者もそのへんの事情はよくわかつていたためではあるまいか。そのこだわりはもちろん殷なる姓にあつたに相違ない。悪逆な殷（の紂王）のイメージがここでも読者の脳裏に刷り込まれる仕組みになっていたのである。

ところで、詞話本第八十四回の末尾には、講釈師の姿を借りた語り手により、永福寺の名があげられていた。以下にそれを引こう。

看官聽說、不当今日許老師一子出家、後來十五年之後、天下荒乱、月娘携領孝哥孩兒、往河南投奔雲離守就婚去、路遇老師、度化在永福寺、落髮為僧。此事表過不題。

ところが、改訂本はこの部分を削除してしまった。そもそも詞話本における永福寺の初登場は、既述のごとく第十四回においてであつたが、改訂本ではそれが第一回に繰り上げられることになった（第十四回は二度目となった）。以下にそれを引こう。

伯爵使道：「到那日、還在哥這里是、還在寺院里好？」希大道：「咱這裡無過只兩箇寺院。僧家便是永福寺、道家便是玉皇廟。這兩箇去處、随分那里去罷？」西門慶道：「這結拜的事、不是僧家官的。那寺裡和尚、我又不熟。倒不如玉皇廟只道官与我相熟。他那裡又寬展、又幽靜。」伯爵接過來道：「哥說的是。敢是永福寺和尚倒和謝家嫂

子相好、故要薦与他去。希大笑罵道：「老花子、一件正事説説就放出屁来了。」

かくて十友結拜は呉道官（諸音は無道官、道義のない官か）の玉皇廟でということになったのだが（第一回）、永福寺はこのちも『金瓶梅』の節目節目に登場してくる。のみならず、『金瓶梅』後半の情節にあつては要石の位置をきめていた。永福寺に象徴される『金瓶梅』の後半では、死者の埋葬と薦拔、さらには転生に関する事項がその中心となつており、西門慶（とその一族）の運勢は一貫して下降曲線を描いていた。それではその前半はどうであつたのか。『金瓶梅』の前半、とりわけ第一回到武松の虎退治にかえ十友結拜の場面をおいた改訂本の前半では、玉皇廟とそこで結拜した十友を中心に情節が展開している印象が強い。そこでの西門慶は間違いなく上昇曲線にのつていた。改訂本における改訂のねらいのひとつは、前後半の対比をより明確にすべく、もともと前半の、したがつて西門慶盛運の象徴でもあつた呉（無）道官の玉皇廟（その実、無道官なのは西門慶であり、玉皇廟は後述するごとく潘金蓮の象徴であつたが）を、より強烈に読者の脳裏に印象づけることであつたに相違ない⁽¹²⁾。

ひるがえつて考えるに、右上がりの上昇曲線から、こきざみな上昇下降を繰り返しつつしばらくその状況をたもつ高原期に移行する契機ともなつたのが、第三十九回の、正月九日に玉皇廟でおこなわれ、官哥のため法名を請うた還願打醮であつた。当然ながら、玉皇廟を詠んだ韻文もこの回に配されていた（改訂本の第一回にはこれと異なるやや短い韻文がみえるが、十友結拜の趣向導入にともない改訂作業実施者に持ち込まれたものであつて、本来のものではなかつたろう）。詞話本では、この回にいたり、醮の儀礼の一環として「齋意」を読み上げるなかで、初めて西門慶の祖母、父母などの名氏が明らかにされることになつていた。この点、西門慶の先祖の紹介を第一回に移した改訂本は、前半における玉皇廟の役割を読者に印象づけることには成功したものの、この場における西門慶内心の得意のほど（こ

の当時であるから、当然いわゆる心理描写などのぞむべくもないのだが）を讀者に印象づけんとした『金瓶梅』（詞話本）の作者の意図を汲み取ることは失敗した、あるいはその意図を承知のうえ、あえて玉皇廟を印象づける方をとつたとみなせる（『水滸伝』には西門慶の父祖に関する記述はない）。しかし、このたび官哥がえた法名はなんとその短命と西門慶一家の没落を暗示する呉応元（無応願）であった。

ところで、第三十九回におけるしかけは玉皇廟での醮ばかりではなかった。そもそもこの日正月九日は玉皇大帝の生日であり、西門慶もそれを期して官哥の還願打醮を執り行つたわけであるが、また潘金蓮の生日でもあった（『水滸伝』には潘金蓮の生日に関する記載もない）。いったい『金瓶梅』における玉皇廟と永福寺は、潘金蓮と呉月娘の象徴ともみることが出来る。八月十五日に生まれたので月姐とよばれており、結婚後それが月娘になったなどともつともらしい説明がなされているが、それを鵜呑みにする必要はあるまい。呉月娘は『金瓶梅』の主要人物中数少ない天寿を全うする人物であった。であつてみれば、その姓名もそれを暗示する言葉の諧音だった可能性がある。筆者はそれを無鍼娘（刃物で死なない女）であり、なおかつ無日娘（不満をいわない女）であつたとみておきたい。

閑話休題、醮の当日の政和七年正月九日、呉月娘は自宅に尼僧をよび、西門慶の妾らとその因果物語を聴いた。説かれた宝卷名は明記されていないが、『五祖黄梅宝卷』であるといふ⁽¹³⁾。『五祖黄梅宝卷』は父なし子として生まれた五祖が四祖の説法を聴いて正果をえ、のち母親を得度昇天させるといふものだが、呉月娘が普静の請いをいれ、西門慶の遺児孝哥を出家させ、自身は天寿をたもつという後日譚の伏線となる一方、『金瓶梅』が道から仏へ舵をとる分岐点がこの回であることを示す役割を果たしたとおぼしい。呉月娘が自宅で宝卷を聴くのはこれが初めてであった。

一般に『金瓶梅』は潘金蓮と李瓶児の西門慶をめぐる対立を軸に情節が展開していると思われている。だが、李瓶

児は呉月娘の身代わりにすぎず、真の対立軸は潘金蓮と呉月娘の間にあった。この間の事情を張竹坡は「瓶児与月娘、始疎而終親、金蓮与月娘、始親而終疎」と表現した（批評第一奇書金瓶梅説法）。さらにまた、『金瓶梅』の情節は、前半は玉皇廟と潘金蓮を中心に、後半は永福寺と呉月娘を中心にまわっているとみなせる。この第二十九回から西門慶が死ぬ第七十九回までは、両者の、受胎競争の形をとったせめぎあいの時期（前記の高原期に相当する）であった（余談だが、『金瓶梅』の重要情節は九のつく回におこることが多い）。そして、第六十二回の李瓶児の死をへた第七十五回において、対立の矢面に立たざるをえなくなった呉月娘は、突然、脛を切ったかのごとく潘金蓮への口撃を開始し、自身の病と引き替えに、潘金蓮の最初にして最後の受胎機会を誤らせることに成功するのである。

既述のごとく、呉月娘の生日は八月十五日だったとされている。だが、そこから李瓶児の生日本正月十五日（上元＝元宵節）を引けば（といっても八から一を引き、十五はそのままにするのだが）七月十五日（中元）となる。呉月娘は李瓶児の死後ますます仏教への傾倒を深めることになるのだが、それは、月娘がこの時すでに中元を象徴する存在に変化していたためとおぼしい。こんなことをいうと突拍子もないことをと思われかねないが、二人の間には、ともに西門慶の子を産むという共通点があったし、なにより、『金瓶梅』では明示されぬ普静による薦抜の日が、本来七月十五日の中元の日に設定されていたことをうかがわせる事実もあるからである。

黄森氏はその『《金瓶梅》大事年表』のなかでこの日を秋とし、魏子雲氏はその『金瓶梅編年記事』で「某月日」とする。⁽¹⁵⁾黄氏がこの日を秋としたのは、直前の春梅の死の場面に「到六月伏暑大氣」とあり、薦抜のおり「金風淒淒」だったことによるうが、当て推量にすぎない。だが、『金瓶梅』の続書と自らを位置づける丁耀亢の『続金瓶梅』第一回の「普浄師超劫度冤魂 衆孽鬼投胎還宿債」に以下のごとき記述があった。

那日正是七月十五之夜、為三元地官解厄之辰、月娘仏前拈香拜了、和小玉藏在東廊尽頭一間伽藍殿座下、鋪些乾草、和衣而寢。……今日普淨禪師是地藏菩薩化身、自知衆生遭劫、來此超度。

もちろん『続金瓶梅』は『金瓶梅』ではなく、そこに七月十五日とあったところでこの日が『金瓶梅』でも七月十五日であった証拠とはならない。事実『続金瓶梅』はこのときの孝哥の年令を四歳としていた。だが、丁耀元のみた『金瓶梅』のテキストがこの日を七月十五日としていた可能性や、読者の多くがこの日を中元の日と認識していた可能性は残ろう。

李瓶児は官哥を西門慶の意志に従い、呉（無）道官の玉皇廟の庇護下におかんとしたが、皮肉にも、玉皇大帝の生日に生まれた潘金蓮の手によって夭折させられ、自らも命を縮める結果になってしまった。他方、呉月娘は西門慶の死後潘金蓮を遠ざけ、西門慶の転生として生まれた孝哥を永福寺で普静の手にゆだねて斬死の運命から免れさせ、自らも七十の天寿を全うすることに成功したのである。二人は合わせて紂王の姜皇后に相当し、官哥と孝哥はその二人の息子、殷郊と殷洪に相当するのである。

四

ここで、玉皇廟と永福寺をめぐる主要な事件を以下に書き抜いておこう。⁽¹⁶⁾

第一回 玉皇廟で十友と結拜（改訂本のみ）

第十四回 花子虚、永福寺にて勾引され、潘金蓮の生日に西門慶玉皇廟で醮をおこなう

第二十八回 西門慶、永福寺に賀千戸の昇遷を送る

第三十五回 西門慶、永福寺で荆都監らと会い、玉皇廟で中元の醮をする

第三十六回 蔡状元、永福寺に寄居する

第三十九回 官哥の誕生を祝う醮を玉皇廟でおこない、呉応元と名づける

第四十九回 西門慶、永福寺に宋喬年を送り、胡僧から淫薬を入手

第五十七回 永福寺道長老、改建資金を集めるため西門慶を訪ね、五百両をえる

第五十九回 呉道官廟にて官哥の葬儀を執り行う

第六十二回 西門慶、李瓶児のため玉皇廟に符をもとめるも効果なし

第六十三回 呉道官、西門慶の家で李瓶児の首七

第六十五回 呉道官、西門慶の家で李瓶児の二七

永福寺道堅長老、西門慶の家で李瓶児の三七

呉道官、十月十一日白日、李瓶児の似姿を懸ける

第六十七回 玉皇廟・永福寺、李瓶児の六七に疏を送る

第七十八回 呉道官、西門慶の家で李瓶児の百箇日

呉道官、正月三日に西門慶の家を訪ね、九日の年例打醮の帖を送る

第八十回 二月三日、呉道官、西門慶の家で西門慶の二七

第八十八回 春梅、潘金蓮の死骸を永福寺に埋葬す

陳經濟、父親の靈柩を永福寺に寄託し断七をおこない、あわせて潘金蓮を弔う

第八十九回 呉月娘、西門慶の墓参ののち、永福寺で春梅にあう

第九十八回 濟南に赴く周守備を送り、陳經濟永福寺にゆく

第九十九回 陳經濟、永福寺に埋葬され、韓愛姐墓参す

第一百回 永福寺における普静の薦拔、呉月娘、孝哥を普静に托す

第三十九回が『金瓶梅』のひとつの分岐点であることは既述した通りだが、分岐点はこれのみにとどまらない。西門慶が雲遊の胡僧から補壯薬を手に入れた第四十九回もいまひとつの分岐点であった。

改訂本の第四十九回は「正是：柱（拄）杖桃擎双日月、芒鞋踏遍九軍州」で終わるが、詞話本はこのあと「有詩為証：弥勒和尚到神州、布袋横拖拄杖頭、饒你化身千百化、一身還有一身愁。畢竟未知後來何如、且聽下回分解」が続く。改訂本は胡僧の正体が弥勒菩薩であることを暗示するこの詩を省いた。

ところで、西門慶が胡僧から補壯薬を手に入れる永福寺の創建の由来だが、この回と第五十七回ではなぜか異なる説明がなされている。第五十七回と直前の第五十六回につき、黄霖氏は「時間綫索含混、情節也有勉強補入之嫌」としたが、この両回を含む第五十三回から第五十七回までは、もともと沈德符によって「陋儒補以入刻」と断ぜられていた。以下では永福寺と補入問題の關係につき、いささか考察を試みたい。

詞話本は第五十七回冒頭で永福寺初代住持万廻老祖について語ったのち、西印度国出身の道長老が永福寺再建を発心した経緯を語るのだが、そこに以下のごとき一節がある（以上の部分、省略はあるが改訂本もほぼ同様である）。

且前日山東有個西門大官、官居錦衣之職。他家私巨万、富比王侯、家中那一件没有？前日饒送宋西廉御史、曾

在咱這裏擺設酒席。他因見咱這裏寺宇傾頹、就有個舍錢布施、鼎建重新的意思。咱那時、口雖不言、心窩裡已有下幾分了。今日呵、若得那個檀越為主作倡、管情早晚間把咱好事成就也！咱須辨自家去走一遭。

ここにみえる西門慶が宋御史を永福寺で送る段は、第四十九回、つまり西門慶が胡僧から補壯薬を手に入れた回であった。以下に、詞話本の、そのおり西門慶と道堅長老の間に交わされた会話を引こう。

西門慶回到方丈坐下、長老走来遞茶、頭戴僧伽帽、身披袈裟、小沙弥拿着茶托。遞茶去、合掌道了問訊。西門慶答礼相還、見他雪眉交（皎）白、便問：「長老多大年紀？」長老道：「小僧七十有五。」西門慶道：「倒還這等康健！」因問：「法号称呼甚麼？」長老道：「小僧法名道堅。」有幾位徒弟？長老道：「止有兩個小徒。本寺也有三十餘僧行。」西門慶道：「你這等（寺）院倒也寬大、只是欠修整。」長老道：「不瞞老爹說、這座寺原是周秀老爹蓋造、長署（住）裏沒錢糧修理、丟得壞了。」西門慶道：「原来就是你守備府周爺的香火院！我見他家庄子不遠。不打緊處、你稟了你周爺、写個緣簿、一般別處也再化着、来我那裡、我也資助你些布施。」道堅連忙合掌問訊謝了。西門慶分付玳安兒、書袋内取一兩銀子謝長老：「今日打攬長老這里！」道堅道：「小僧不知老爺來、不曾預備齋供。」西門慶道：「我要往後辺更更衣去。」道堅連忙叫小沙弥開便門。

かくて西門慶は方丈のうしろの五間の大禅堂で運命の胡僧にめぐりあうことになるのであるが、それはさておく。

第五十七回には道長老とあり、第四十九回には道堅（長老）とあるが、両者が同一人物を指さんとしていることに疑問の余地はない。だが、その読者に与える印象は大いに異なる。丁朗氏はこれを「極普通の老方丈」ならびに「来自印度的一位外賓」と表現した。⁽¹⁷⁾ ちなみに、道堅長老は第八十九回にも登場するが、極普通の老方丈としてであつた。⁽¹⁸⁾ 以上により以下のごとき結論に達しても、およそ論理の飛躍と非難されることはあるまい。第五十七回は、陋儒によ

るか否かは別として、架空の創建の由来譚を付加し、住職もそれにみあった外国僧とすることにより永福寺の寺格を高め、しいては『金瓶梅』における重みをつけるべく、前後の回に遅れて書かれた、と。

以上について確認したうえで、さらに二点、論じておきたいことがある。永福寺が第四十九回で周秀の蓋造になるとされている点と、第五十七回でこれを勅建した者として梁の武帝が擬せられている点である。

周秀は西門慶が永福寺で胡僧から補壯薬をえた政和七年の翌年、重和元年正月の西門慶の死後売りに出された春梅を妾とし、これに子を産ませ、建炎元年、すなわち西門慶の死後九年目に、四十七歳で陣没した人物である。ひるがえって西門家と永福寺との関係だが、西門慶の墓が永福寺内に造られていない点に鑑み、檀家でなかった可能性が高い。なにせよ、道（堅）長老が奉賀帳を回すなら、最初に持ち込むべき相手は周秀であった。さらに、西門慶と道堅長老が既述の会話を交わしたおり、周秀は三十代後半であったはずで、そのたかだか二十年ほど前に蓋造した永福寺が荒れていたとは考えにくい。そもそもいくら大檀家でも二十歳そこそこの若者に一寺の蓋造が出来たはずもあるまい。周秀蓋造説には無理があるといわざるをえない。これ以後、永福寺につき周秀の香火院とのみ紹介し、その蓋造に言及しなくなるゆえんであろう。『金瓶梅』（詞話本）の作者もそうした方向での軌道修正をはかっていたとおぼしい（第四十九回は修正漏れか）。

話はかわる。周秀は第百回の普静の薦抜のおり、西門慶に先んじ、第一番目に薦抜されていた。これをみても『金瓶梅』における周秀の位置がわかる。案ずるに、戦死はしたが金軍と戦った周秀には、かつて殷を征伐した周のおそらくは武松が梁山泊に上ったのちの武王のイメージが託されていたのではなかったか。⁽¹⁹⁾この意味で、まず薦抜されるべきは西門慶でなく周秀だったのであろう。周秀の香火院永福寺で普静が薦抜をするというこの構想は、『金瓶梅』

が当初より内包していたものだったのであるまいか。

ところで、梁の武帝といえ、その破戒行為ゆえ蛇となったことを夢枕で訴えた邨皇后を供養すべく、女性の嫉妬を諷める「梁皇懺」をつくったことで知られる。「梁皇懺」は女性の供養にもちいられることが多く、「金瓶梅」でも第六十五回の李瓶児の三七のおりにも、永福寺の道堅長老によって誦せられていた。わざわざ永福寺の創建者に梁の武帝を担ぎ出した意図は明らかであろう。

小結

詞話本から改訂本への改訂作業は、『金瓶梅』（詞話本）の作者の、武王伐紂と引き続き封神をその中心にすえるという構想をよく体得した者によってなされた（よって、詞話本の最終完成者とのこの人物とが同一人である可能性も否定出来ない）。西門慶の十友の姓名は、そもそも応白疇、謝稀怠、助合捻、損添話、無忝恩、運離手、常時節、不知道、白来搶の諧音だったとおぼしいが、改訂作業のなかでより完備し、なおかつ凝ったものにかわっていった（花子虚は話子虚の諧音）。なかで注目されるのが、白来搶から白賚光表字光湯への変化と、そこに新たに付された命名由来譚の存在である。白賚光表字光湯は武王伐紂を意識したものであった。改訂作業実施者は、己が理解した『金瓶梅』（詞話本）の構想を、読者にも認識してもらいたかったに相違ない。

改訂本はこの十友の紹介を第一回冒頭にすえ、なおかつその結友の場として玉皇廟を用意した。当然これにも改訂作業実施者なりの苦心があったはずである。詞話本と改訂本とを比較すると、変化が目立ち、なおかつ「陋儒補入問

題」とかかわる場面で必ずかかわってくるのが玉皇廟と永福寺であることに気づく。改訂本における第一回改訂の狙いは、呉（無）道官の玉皇廟に、十友に代表される俗界（此岸）の象徴の役割をより強くもたせることにあったとおぼしい。

玉皇廟での結友に始まる前半のハイライトは第三十九回にあった。西門慶はわが子官哥のため、玉皇大帝の生日正月九日に、玉皇廟の呉道官に法名を請うた。だが、与えられた法名は呉応元（無応願）であった。この回は西門慶の絶頂期のとば口であったが、不吉な影がさしはじめる回でもあったのである。官哥はこの日が生日であった潘金蓮によって後日殺される運命にあった。

この回以降、『金瓶梅』には、すでに存在していた潘金蓮と李瓶児の対立軸に加え、潘金蓮と呉月娘の対立軸が持ち込まれることとなった。呉月娘（無鍼娘ないしは無日娘）はもともと西門慶の交遊関係に不満をもっていたのだが、潘金蓮との受胎競争と李瓶児の死をへて、潘金蓮と堂々の一戦を交え、永福寺でわが子孝哥を普静の手にゆだね、自身は天寿を全うするまでに変身をとげたのである。これも、そもそも上元の正月十五日を生口とする李瓶児の死後、中秋の八月十五日を生口とする呉月娘が、中元七月十五日を象徴する存在と変わったからではなかったか。

『金瓶梅』の前半は、玉皇廟に象徴される世俗と潘金蓮を中心に情節が進み、官哥と李瓶児の死に始まり、西門慶の死後に本格化する後半の情節は、呉月娘を舞台まわしに、普静と永福寺に象徴される薦拔と転生を中心に展開する。これが『金瓶梅』の基本的な構造であった。『金瓶梅』の中盤は、玉皇廟と永福寺の、つまりは潘金蓮と呉月娘のせめぎあいの時期であったが、この、本来延々と続いたかも知れぬせめぎあいの時期を短縮し、時計の針を一気に進める役割を果たしたのが、第四十九回の、西門慶の永福寺における補壯薬入手であった。

そもそも永福寺創建の由来については、第四十九回と第五十七回で異なった説明がなされていた。このことは、詞話本にも成立時期の異なる部分、すなわち補入部分があることを示している。永福寺の寺格を上げ、住職を異人とする後者は、詞話本における補入部分に相違ない。詞話本と改訂本が大きく異なる第五十三、五十四回についていえば、本来のものと否とは別として、自己矛盾を抱えつつも、詞話本の方が原作に近いといえよう。おそらく王汝梅、石昌渝両氏の説が真実に近からう。

ひるがえって『醒世姻縁伝』の作者が西周生を名乗ったゆえんだが、『金瓶梅』が周の武王の殷の紂王征伐をその構想の骨格にすえる作品であることを知悉する作者が、自身の作品がその続作たることを宣言すべく命名したものだっただけでもない。『醒世姻縁伝』も転生をテーマとする作品であった。

- 1 『東方学会創立五十周年記念 東方学論集』所収、東方学会、一九九七年五月。
 - 2 『中国古典小説研究』第三号所収、中国古典小説研究会、一九九七年十二月。
 - 3 王汝梅氏の『金瓶梅探索』（吉林大学出版社、一九九〇年九月）の第三講「版本系統」にみえる言葉。両系とは詞話本、改訂本（崇禎本）の二系統をさし、これに改訂本系統の竹坡本（第一奇書本）を加えたものを三類という。なお、以下の王氏への言及もこれによる。
 - 4 小野忍・千田九一訳『金瓶梅』第一冊所収、岩波書店、一九七三年六月。
 - 5 王汝梅氏の前掲書は詞話本と改訂本の相違を以下の五箇条にまとめている（5以外は見出しのみとした）。
- (1) 改写第一回及不収欣欣子序。

- (2) 崇禎本第五十三回和第五十四回批万曆詞話本改写、改動大、与詞話本大異小同。
- (3) 崇禎諸本均避崇禎帝朱由檢諱、現存詞話本不避（張評本避清諱）。
- (4) 崇禎本在版刻上保留了詞話本的殘存因素。
- (5) 其他相異之处：詞話本第八十四回吳月娘遭劫、后為宋江所救的一段文字、崇禎本刪去。崇禎本刪去詞話本中的大量詞曲。除第一回、第五十三至五十四回、第八十四回的改写刪減外、崇禎本对詞話本很多回的某些情節有改動。詞話本以冀魯豫交界区方言為基礎方言、運用了大量方言詞語、崇禎本改写者对此作了刪減或改換。詞話本回目对仗不工整、崇禎本回目較工整。崇禎本把詞話本回前詩詞作了改換。

- 6 王汝梅氏の前掲書は、崇禎本の第五十三、五十四両回が詞話本を改写したものと認めたのち、「詞話本五十三至五十四回、与前后文脈絡基本貫通、語言風格也較一致。而崇禎本五十三至五十四回、在語言風格上与前后文不相一致、描写粗疏、改写者芸術修養不高。……第三十回眉批云……評点者……他認識詞話本五十三回写月娘求『種子靈丹』、結胎、是俗筆改写補入的。評語称二十卷本為元（原）本、肯定批改本。這越加說明崇禎本五十三回は改写者的手筆。如果沈德符所云：『陋儒補以入刻』（『万曆野獲編』）的話写在崇禎初年、這補入的文字、可能指二十卷本之五十三至五十四回、而不是指十卷本《金瓶梅詞話》として、崇禎本の第五十三、五十四回こそが沈德符のいう陋儒の書き足し部分であるとの見方を示した。石昌渝氏も『金瓶梅』の第五十三回至五十七回辨「《金瓶梅》版本系統再認識」、『小説戲曲研究』第三集所収、一九九〇年十二月）で、『金瓶梅』の第五十三至五十七回について、詞話本の五十三、五十四両回は原本固有のもので、残る三回は改訂本系統のテクストから取り込んだものであつて、改訂本の五十三回から五十七回はすべて「補以入刻」したもので、詞話本の五十三、五十四回は沈德符のみた初刻本に比しより原作に近いものとする。

- 7 魯歌・馬征編著『《金瓶梅》人物大全』（吉林文史出版社、一九九一年七月）、ならびに黄霖編『金瓶梅大辞典』（巴蜀書社、一九九一年十月）による。

8 以下の張竹坡關係の引用は黄霖編『金瓶梅資料彙編』(中華書局、一九八七年三月)卷二所引のもの(康熙乙亥在茲堂本《批評第一奇書金瓶梅》に依拠するという)ならびに東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫所蔵の玩花書屋蔵板により、明らかな誤刻は正した。

9 『金瓶梅』の第七十三回到西門慶が李瓶児を処女だったかのようにいう場面がある。李瓶児は最初に蔡中書の妾となったが、その妻の愷気ゆえ外の書房に別居していた。次に花太監とあいまいな關係になったが、花太監は宦官だったから、男女の正常な關係は結べなかつたろう。花子虚に話子虚のみならず、那話子虚、すなわち性的不能の寓意もあつたなら、そうした可能性も考えられなくはない。

10 このたび張竹坡の第八十八回の評に以下のごとき一節があることに気づいた。

永福寺如封神臺一樣、却不像一對魂旗引去之惡套、如武大死、永福寺念絳、結穴于永福寺也。楊宗保非數內人、故其念絳用素僧、子虚又用永福寺僧念絳、一樣結穴也。瓶児雖并用吳道官、寔結穴于永福寺、千金喜捨、本為官哥也。至梵僧葉、寔自永福得來、自為瓶児致病之由。而西門蕩血之故、亦由此業起、則西門又結穴于此寺。至于敬濟、亦葬永福；玉樓由永福寺來、而遇李衙內；月娘、孝哥、小玉、俱自永福而悟道；他如守備、雪娥、大姐、蕙蓮、張勝、周義等、以及語殘形怨憤之鬼、皆于永福寺脫化而去、是永福寺即封神臺之意。

とはいえ、武大のために念絳したのは報恩寺の僧であつたし、花子虚の葬儀については「李瓶児就使了馮媽媽請了西門慶過去、与他商議、買棺入殮、念絳發送子虚到墳上埋葬」(詞話本)としか書かれていないから、この評の当否についても多少割り引いておかねばなるまいが、竹坡が慧眼であつたことには変わりはあるまい。もつとも、その竹坡にしても『金瓶梅』全体が『封神演義』の武王伐紂を基本構想にすえたものである点までは見抜けなかつたようだ。

11 周鈞韜『金瓶梅新探』(百花文芸出版社、一九八七年四月)所収の『《金瓶梅》抄引《水滸伝》考探』による。以下の周氏への言及もこれによる。

玉皇廟から永福寺へ

12 以上の諸点については、張竹坡がその「金瓶梅寓意説」批評第一奇書金瓶梅説法」ならびに各回の評のなかでさまざまに論じている。以下に摘記しておきたい。

夫永福寺、湧于腹下。此何物也？其内僧人、一曰胡僧、再曰道堅、一肖其形、一美其号、永福寺真生我之門死我尸、故皆于死後同帰于此、見色之利害。……是玉皇廟、心也。二重殿後、一重側門、其心尚可問哉？故有吳道士主持結拜、心既無道、結拜何益？所以將玉皇廟始、而永福寺結者以此。（寓意説）

起以玉皇廟、終以永福寺、而一回中已一齊說出、是大關鍵處。（説法）

玉皇廟、諸人出身也……然則三人俱発源于玉皇廟也。至于永福寺……未有永福寺之瓜葛也。……故玉皇廟、永福寺、是一部大起結。（第四十九回評）

此回金蓮、乃是一个竟入永福寺、又是一様写法。永福寺中一曰現身之梵僧、二曰長老道堅、然則其寺可知矣。永者、湧也、福者、腹也。湧于腹下者何物也？作者開卷故云「生我之門死我尸」、即此永福寺也。……至于玉皇廟、即黃庭所云靈臺也、天府也、此吾之心也、故云「有道人出入」、蓋道心生也。吳道官蓋喻言西門慶等心中無天理、無道心也。十兄弟在吳道之玉皇廟結盟、其兄弟可知、故必用進第二重殿、轉過一重側門也。衆人齊在玉皇廟側門内会吳道、可知不是天心；而一片冤魂齊集永福寺、可知看得過時忍不過也。（第八十八回評）

玉皇廟発源、言人之善惡、皆從心出。永福寺收煞、言生我之門死我尸也。（第百回評）

13 沢田瑞穂『増補宝卷の研究』(国書刊行会、一九七五年六月)所収の「『金瓶梅詞話』所引の宝卷について」による。原載は『中国文学報』第五冊、一九五六年十一月。

14 黄霖氏前掲注7の書附載。以下の黄霖氏への言及もこれによる。

15 巨流図書公司、一九八一年七月。

16 『金瓶梅』における玉皇廟、永福寺などを論じたものに王景琳、徐匄両氏による『金瓶梅中的仏踪道影』(文化芸術出版社、一

九九一年十一月)があるが、そこに本稿のごとき観点はみえない。

17 『《金瓶梅》与北京』中国社会科学出版社、一九九六年十一月)の第二章「追尋《金瓶梅》原稿所失五回的遺踪」。なお、丁朗氏の「陋儒補以入刻」に関する基本的な見解は『《金瓶梅》初刻本』の「這五回」の原始基本面貌是与現存崇禎本「這五回」相一致的、而現存詞話本第五十三和五十四這兩回之所以与它的前后左右都不能取得一致、不過是現存詞話本初刻本這兩回单独作了一次既不顧頭又不顧脚的大改動而已」というもので、王汝梅氏や石昌渝氏の見解とは異なる。

18 この点についての疑問は夙に Patrick Hanan 氏がその「金瓶梅的版本及其也」(丁貞婉訳、『国立編訳館館刊』第四卷第二期)所収、一九七五年十二月)で指摘しており、石昌渝氏もそれを引きつつ前掲注6の論文で論じている。石氏は西門慶の喜捨した銀子の数につき、第八十九回の呉月娘の言葉や『続金瓶梅』を引きつつ、五百両ではなく五十両であるとも論じている。

19 周秀の寓意につき、竹坡は「春梅死于周義、亦有説也。夫周者、舟也；周秀者、舟中遺臭也、因春梅而遺臭也；周仁者、舟人也；周忠、舟中也；惟周義乃一義渡之舟、凡人可上、隨處可留、喻春梅之狼籍不堪、以至于死也」(第百回評)とするが、こじつけに近からう。